

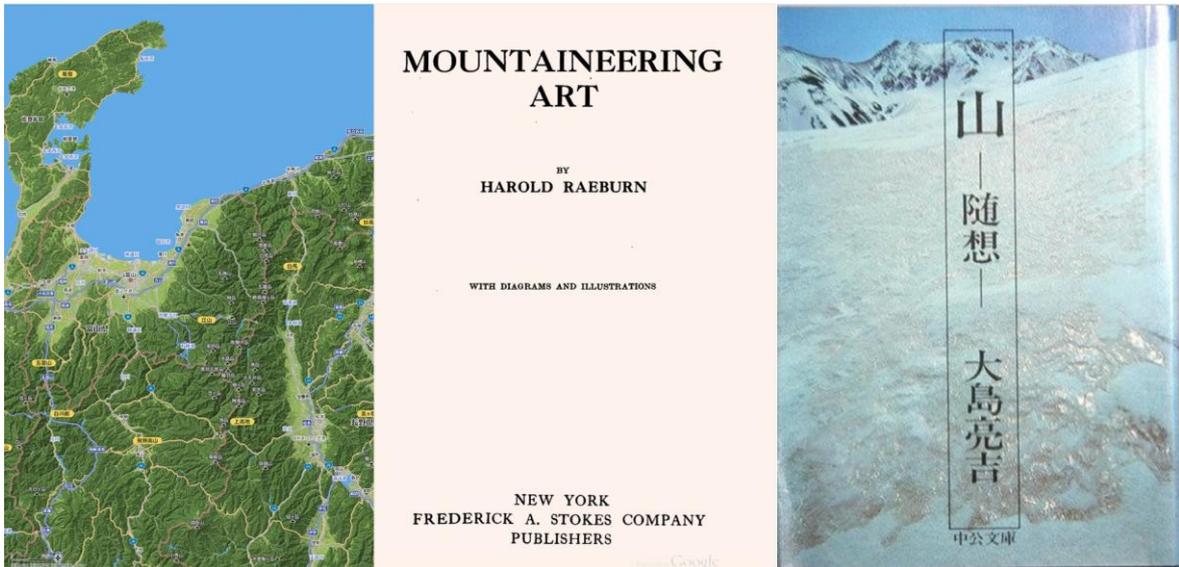
## The Heart of the Mountaineer

### 夏山合宿「雪線の岸辺—若き思い出のために」その後

スコットランドの登山家 Raeburn が“Mountaineering Art” (1920)を書き終えるに際し、山を愛する心を美しく謳いあげ、Envoi(結びの句)とした。その Envoi が我国では「山への想片」として紹介され、登山家の心を捉えてきた。その訳者が判明したのを契機に、Raeburn 特集として昭和 36 年卒の先輩の寄稿を紹介したい。

一つ前の記事で、1949 年の山岳部夏山合宿の手記を紹介した際に、訳者不詳となっていた冒頭の詩「山への想片」の訳者が判明したので、お知らせ方々、探索者の手になるいきさつの紹介文と現代語訳を以下に掲載させていただく。作者の Harold Andrew Raeburn は、20 世紀のスコットランドを代表する登山家で、成功こそしなかったが、1921 年に George Mallory 等とともにエベレストに挑んだ登山家だ；以下の鈴木宏（1961 応化）の文章「ハロルド・レイバーン」で詳しく紹介されている。訳者の大嶋亮吉は 1922 年に北アルプス槍ヶ岳の冬季初登頂に成功するなど、近代アルピニズム揺籃期のリーダーだったが、積雪期の槍・穂高縦走中に悪天候が災いし、滑落死した（1928.3.25、28 歳）。

-----



## ハロルド・レイバーン

S36 年卒 鈴木 宏

羽賀さんの夏山合宿記録 14-26, July 1949 「雪線の岸辺に咲くエーデルワイスの花を尋ねて - 若き思い出のために」の前文として添えられた「Harold Raeburn の言葉」は本文で展開されているさまざまな活動の序曲というべき趣があり、この合宿記録の格調の高さに敬意を表さざるを得ません。これを読んで「Harold Raeburn (スコットランド生まれ；訳者不明)」と表記されたハロルド・レイバーンとはどのような人物であるのか、また訳者は誰なのかを知りたくなりました。検索の結果、Harold Andrew Raeburn (1985-1926) は、The Scottish Mountaineering Club (SMC：スコットランド山岳会) のホームページに SMC の先駆者として詳しく紹介されていました。(訳文-添付1) ハロルド・レイバーンは、英国の王立地理学会と英国山岳会が合同で1921年に、国王ジョージ5世の支援を受け、エヴェレスト登頂をめざしチベットに派遣した踏査隊で、マロリーを含む登山チームを率いた人物であることを知り、己の無知を恥じた次第です。

前文として引用されたハロルド・レイバーンの著作を検索しましたが、情報は得られず、直接 SMC に問合わせたとこ、  
「私達山に登るものには---親わしいものなのである。」は、ハロルド・レイバーンの著作 'Mountaineering Art' (1920年出版) の ENVOI (あとがき)にあるとの返答を得るとともに、そのコピーを頂戴しました。この情報に基づく更なる検索で、このあとがきの日本語訳は、大正13年(1924年)7月1日発行の札幌山とスキーの会「山とスキー」第39号に大嶋亮吉の寄稿した「山への想片(承前)」に掲載されていることがわかりました。(原文-添付2) 大嶋亮吉の訳は、文筆家に相応しい文学的なものですが、その内容は理解しにくい部分もあり、あえて ENVOI を私なりに訳してみました。

### あとがき

なぜ、我々登山家はアルプスを愛するのか？ それは、アルプスには我々の興味をひく美しさと形状の荘厳さがあるためか？ それは、不慮の出来事という危険が伴うかもしれないが、様々な困難と闘うことの純粋な肉体的な喜びのためか？ それとも、知恵をしぼって安全なやり方を発見し、そして高所への立ち入りを監視する氷で覆われた、または岩だらけの砦を克服した際の精神の鼓舞された状態のためか？

それは、黎明の神秘的な光条により、雪、岩および空から奏でられる多色調の壮麗なシンフォニーの中での視覚の強烈な快感のためか？

それは、そびえたつ最高峰の裂けた頂から我々の周辺に広がる広大な新しい地

平線をじっと見つめている際の魂の奇妙な身震いするような高揚感のためか？

あるいはそれは、長時間同じロープで結ばれている仲間であることにより、自分と自分のクライマー仲間との間で作り上げられる思いやり、信頼および友情という人のきずなのためか？

これらの理由にかかわらず、またその他の多くの理由にかかわらず、登山家の心にとって大切なアルプスは、あまりにもいわく言い難いものであり、単なる言葉では表現することはできない。

Envoi の原文、Mountaineering Art (1920) の260-261ページから。

## ENVOI

Why do we mountaineers love the Alps? Is it their beauty and majesty of form which appeal to us? Is it because of the pure physical enjoyment of the struggle with the difficulties, maybe with the dangers of the ascent? or the mental exhilaration of setting one's wits to discover the safe way to overcome the icy or rocky barriers that guard access to the heights?

## ENVOI

261

Is it the exquisite pleasure of the eye, in the splendid symphony of colour tones, struck from the snows, the rocks, and the sky by the mystic fingers of the dawn?

Is it the strange, thrilling uplift of the soul in the contemplation of vast new horizons, spread around us from the splintered summit of some dominating peak?

Or is it the human bonds of sympathy, trust, and friendship forged between us and our climbing companions by long hours of comradeship on the same rope?

For all these causes, and for many others, far too subtle to be expressed in mere words, are the Alps dear to the heart of the mountaineer.

初版  
2015年7月

Harold Raeburn 特集

編集校正：S35 小野桓司  
S28 須山英三

添付1 スコットランド山岳会の史料から

訳者：S36年卒 鈴木 宏

スコットランド山岳会の先駆者

**Harold Andrew Raeburn (1865-1926)**



写真 SMCの史料より

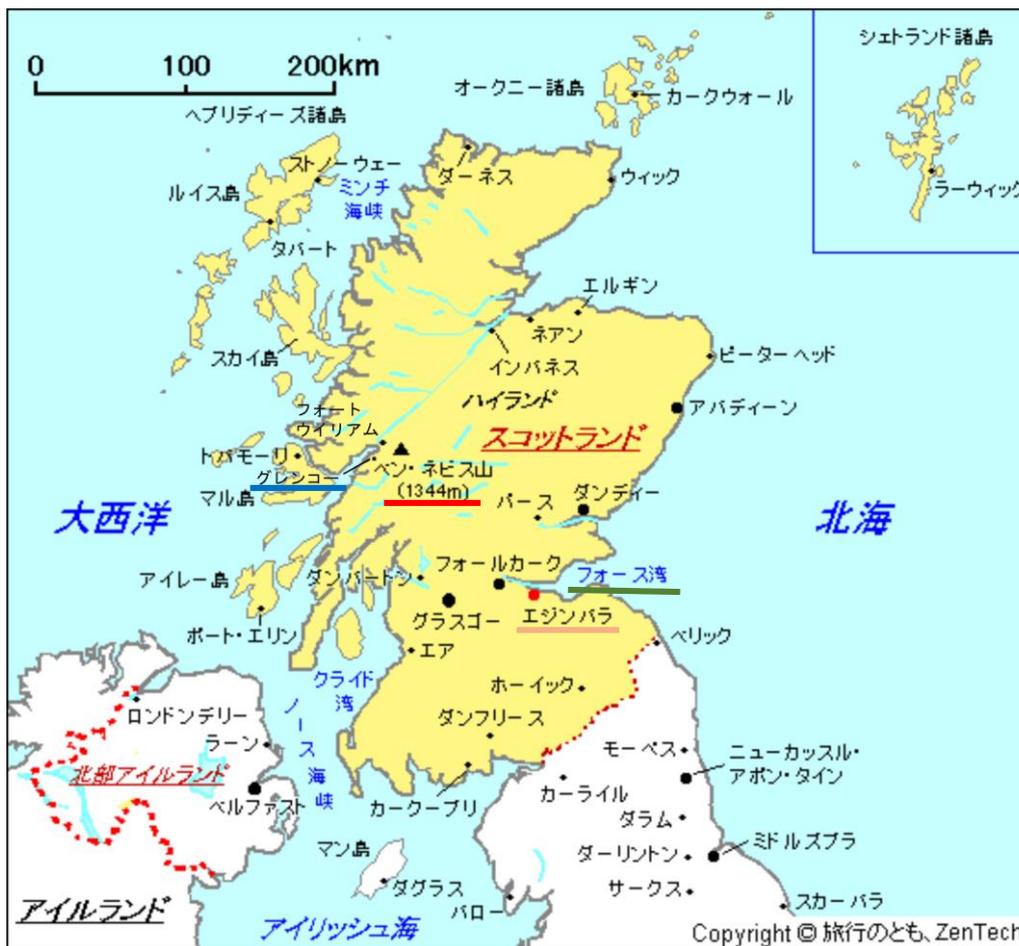
20世紀初めの20年間、文句なしにスコットランド最高の登山家であったハロルド・アンドリュース・レイバーンは、1865年7月21日、エディンバラ市グランジ・ローン 12番で生れた。彼はウィリアムとジェシー・レイバーンの四男として成人し<sup>1)</sup>、醸造技術者として家族の経営する醸造所で働くようになった。どのように、またなぜ彼が登山を始めたのかについての記録はないが、鳥類学に対する熱い情熱が急峻な場所への彼の関心を駆り立てたのであろう。ずっとエディンバラのソルスベリ岩山群のふもとで育ち、細身で強壮だった彼はすぐに岩と氷の垂直な世界に順応した。

彼はフォース湾での帆走とヨットレースにも熱中した。そしてここで、彼が生涯に亘って情熱を傾けた第3のもの、鳥類学、との出会いがあったであろう。兄のジョンと共にグラントン(フォース湾沿いのエディンバラの北部地区)を本拠とする王立フォース・ヨットクラブ(RFYC)のメンバーとしてレースに出た。彼らはコリンシアン杯レースで三度優勝しこのカップを贈られたが、それをRFYCに返還したのでRFYCはレイバーン・トロフィーと改称した。このレイバーン・トロフィーを冠したレースは今でも続いている。シェットランド諸島の海鳥に関する彼の観察日誌は、国立スコットランド図書館に収められている。

性格に関しては、野心的でたくましい登山家であれば持っている必要な決断力と馬力が彼に備わっていたことは明らかである。マッケイ卿はレイバーンについて、「彼は鳥の繁殖場所を捜し求める単独での海蝕崖のクライミングによって鍛えられていたので、肉体的に、また精神的に鋼のように強靱であった。彼はまたどんな動作でも確実、断固、正確にこなした。」と書いている。マッケイ卿は更に、「驚くべき強さの指で、きわめて小さなホールドでも、確実に、そしてまっすぐ下向きに接触して力を加えることができた。」と記している。

レイバーンは一生独身を貫いたが、時折女性達と登っていた、そしてこの中には妹のルースが含まれており、ルース自身も熟練クライマーであった<sup>2)</sup>。スコットランド山岳会は1889年に創設された。レイバーンは1896年に入会し、そして数年の内に指導的なクライマーになり、スコットランド各地の多くの古典的ルートに登った。スコットランドには、「レイバーンのルンゼ」が数か所散在している。

特にベンネヴィス(スコットランドにあるイギリス諸島の最高峰(1344 m))では、難ルートでの華麗な記録を残している。1901年6月のオブザーバトリ稜の単独初登(難度VD<sup>3)</sup>)、1902年6月の単独でのオブザーバトリ・バットレス(難度VD)、その2日後の北東バットレスのアレート(難度S イングリス・クラーク夫妻と)、1906年のグリーン・ガリー(難度IV, 4<sup>4)</sup>)の冬期初登。この1906年の初登は、スイス人アルピニストのエバーハード・フィルディウスとであったが、その後のガイドブックではあまり認められなかった。その理由は、彼が左側のコームの岩場を登らず、ルンゼの雪と氷を辿ったからである。実際のところ、レイバーンが登ったことは、1937年までには完全に忘れられていたが、その年ジム・ベルは、これは初登でないかと考えながら冬期の第2登を果たした。



<http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/british/Map-UK-Country-Scotland.gif>

グレンコー（スコットランド西部、ハイランド地方南西部にある溪谷）のブロイケイル（1021 m）では、クロウベリー・ガリーの三つの初登を行った。これらは、当時スコットランドで最も困難なロッククライミングであったクロウベリー稜直登の1909年の冬期初登および第2登、それとスコットランド人としての初登（1902年）である。彼のロッククライミングスタイルは、力強く、自分の身体を岩に接近させるものであった。一方、彼は正確なクライミング時間をいつも考えていたので、そのために仲間を怒らせることもあった。このことに関してユーモラスな逸話が残されている。ニュービッグングという名前の会員仲間がベンネヴィスをはじめて登って、そのルートを‘ニュービッグングの80分ルート’と名付けたが、これは前年登られた‘レイバーンの18分ルート’に倣ったものであった。

スコットランド以外の地域でも、彼は素晴らしい登山記録を残している。これには、1906年のマッターホルンのツムットリッジの英国人としてのガイドなしの初登、友人のウィリー・リンとの1910年のディスグラティアの北壁のクライミング、メージュの最初の単独でのトラヴァース、その他ノルウェーとコーカサスでのいくつかの初登が含まれる。彼は、1913年と1914年に2回コーカサスへの興味ある遠征を行った。最初の遠征では、レイバーン等は5つの山の初登頂を成し遂げ、そしてウシュバ（4737 m）に挑んだが悪天候のために引き返した。1914年新たに4

つの山を登頂し、下山した時第一次世界大戦が勃発したことを知った。1902年以降、彼はガイドなしで登った。1904年、レイバーンは英国山岳会（1857年創設）の会員となった。

1909年、レイバーンはSMCの副会長になり、その後会長職の就任要請があったが、これを断っている。彼の著作‘Mountaineering Art’は、原稿が完成していたが、丁度その時第一次世界大戦が勃発した。次の6年間は航空機工場での長時間の重労働のために登山は止めざるを得なかった。（49歳の時、彼はイギリス陸軍航空隊に志願したが、年齢制限で入隊できなかった。）1919年大戦終結を祝って、彼はアルプス登山を再開し、メージュのいくつかのリッジの単独トラヴァースを行った。

1920年、彼の著作は大戦のために延期されていたが、ようやく出版された。出版されたものの、彼は運が悪かった。というのは、それまでに彼の著作は多少時代遅れになってしまっていたからである。同じ年のイースターにSMCの年会在フォートウィリアムで開催された時、レイバーンは、スコットランドにおける彼のおそらくもっともすばらしいクライミングであったと思われるもの、即ちベン・ネヴィスのオブザーバトリ稜の冬期初登を成し遂げた。会員仲間のモウンゼイとゴッグスと共に、30mのロープを用いて、3人はわずか6時間弱でこの難ルートを完登した。各人、柄の長いピッケルを用いたが<sup>5)</sup>、アイゼンは用いなかった。3人のすべてのクライマーに要求された精神的・肉体的コントロールは、ほとんど奇跡としか言いようがないものであった。

1920年、レイバーンはカンチェンジュンガに遠征し、そして1921年、エヴェレスト踏査隊の登山隊を率いた<sup>6)</sup>。彼はインフルエンザに罹っていたが、隊の編成と準備に必死に努力した。遠征隊がチベットに到着したころ、現地では赤痢が流行っていた。これに罹患して一人の隊員は死亡し、そしてレイバーン自身も運び下ろされ、2か月間入院せざるを得なかった。常識に反し、彼は遠征隊に戻ったが、体力は回復せず、健康を取り戻すことはなかった。さらなる健康の衰えのために、5年後1926年12月21日エディンバラにて死去した。

過去の卓越した会員の名前をとって名付けられた2つの初期のSMCヒュッテ、すなわちトリンドンのリン・ヒュッテおよびネヴィスのチャールス・イングリブ・クラーク(CIC)ヒュッテと同様に、新しいクラブヒュッテ（これは1988年に利用可能になった）の建設に関して、このヒュッテの名前もクラブの最高の先駆的登山家の一人、すなわちハロルド・レイバーンの名をとって名付けられるべきことが相応しいとされた。レイバーン・ヒュッテはダルウィニーとニュートンモアとを結ぶ街道筋にある。そのすぐ近くにはクリーグドゥー岩石群があり、そしてその急峻な岩場をレイバーンは1903年に初登している。

最高の瞬間：Green Gully（1906年）、Crowberry Gully（1909年）および Observatory Ridge（1920年）の冬期初登；多くのすばらしい夏期ルート

書誌：‘Mountaineering Art’, Harold Raeburn (1920, T. Fisher Unwin) ; In Memoriam (W.N. Ling, 1927, SMCJ Vol. 18, pp. 25-31) ; ‘Vignettes of Earlier Climbers’, Lord Mackey (1950, SMCJ, Vol. 24, pp. 141-180) ; ‘Of Beer and Boats’, K.V. Crocket & J.R.R. Fowler (1997, In Miscellaneous Notes, SMCJ, Vol. 36, pp. 380-3) ; ‘Ben Nevis – Britain’s Highest Mountain’, Ken Crocket (1986, Scottish Mountaineering Trust)

訳者注：1) 彼は Edinburgh の Watt Institute (現 Heriot-Watt University) で化学を学んでいる (The Scottish Mountain Heritage Collection より)。

2) 原文には his sister Ruth とあり、Ruth は彼より年上かどうかが判断できなかったが、Ruth が会員であった Ladies Scottish Climbing Club (LSCC) の 1909 年の写真を見る限り、Ruth は当時 44 歳の Harold の年齢には達していないように思われる。

3) UK のロッククライミングルートグレード。UK の難易順位は、Easy (rarely used), Moderate, Difficult (D or Diff), Very Difficult (VD or V. Diff), Hard Very Difficult (HVD), Mild Severe (MS), Severe (S), Hard Severe (HS), ...Extremely Severe (ES)となっている。

4) スコットランド冬期グレード。ローマ数字は全体的なグレード、一方アラビア数字は最高難度のセクションの技術的グレード。最高難度ルートは VIII-IX。

5) Mountaineering Art や LSCC の写真から柄の長さは 1.2-1.3m と思われる。

6) Royal Geographical Society と Alpine Club が合同で派遣した遠征隊の総隊長は Charles Kenneth Howard-Bury 中佐 (38)。Harold Raeburn (56)、Alexander Mitchell Kellas (53) および 2 名の若手 George H. Leigh-Mallory (35)、Guy Bullock (34) から構成された登山隊は、レイバーンが率いた。2 名の若手はノースコルまで到達した (Mount Everest, The Reconnaissance, 1921 by Lieut.-Col. C.K. Howard-Bury, D.S.O. and Other Members of the Mount Everest Expedition, Longmans, Green and Co., 1922)。

以上

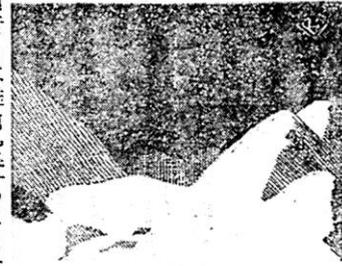
註：この著作物の原文の著作権は SMC が有しています。翻訳文が蔵前山岳会関係者内でのみ回付されることを条件に、翻訳が認められました。原文は

<http://www.smc.org.uk/Gallery/SMC%20Pioneers/HR.php>

で閲覧できます。レイバーンの ‘Mountaineering Art’ はグーグルを經由して、無料で入手できます。

添付 2

# 山とスキー 第39号 大正13年7月1日 札幌山とスキーの会 発行



## 山への想片 (承前)

大 嶋 亮 吉

先にも引用したノーマン・コーリイは、マンマリーイとは同じ時代の人ではありましたが、前述のやうにある點では少しマンマリーイとは考へを異にしてゐるやうなふを好まぬ登山者の山へのいろ／＼なる想ひを一つに萃めて言ひきつた、味ひ深い言葉であると共に、また、現今英國一言流の登山家で、高梁索通として知られ、現に一九二一年のエヴレスト登山隊のリーダーに推されたハロルド・レーバンは六十歳に近き身ですでにその前年よりヒマラヤの諸高峯に登山を試みてゐた人でありますが、その一九二〇年に著した「登山術」Mountaineering なる著書の跋詞として次なる言を致してをります。

「私等山に登るものは、何故にこの様にまで山々を愛するのであろうか。それは山々のその形態の美しさにあるのだろうか。或ひは時には危険を伴ふその登攀の困苦の闘ひに依つて得る純な肉体的な歡喜に因るのであろうか。或ひはまたそれはこの山々の至高の王國への關門を護る氷と岩との峭壁を打ち越えて、そこに安全な途を見出すために、私等の機智を置かしめるその精神的な歡喜に因るのであろうか。

またそれは黎明のその神祕な指先に依つてなされる、雪、岩、空のその色彩と調子との壯麗な交響樂が、私等に訴へるその視覺の特異な快感に因るのであろうか。

それにともまた、それは群衆を照して尊ゆる高峯の頂に立つて、私等の周圍に新らしく擴がつた、廣い地平線の觀想の不思議な、刺戟的な精神の向上に依るのであろうか。或ひはまた、それは同じ一條の繩に相互を長い間結ぶその友達たることに依つて、私と友との間を固く結ぶ、同情と信頼と友との人と人とのひとつの連鎖にあるのだろうか。

すべて此等の、尙他にまだ數多くあるいろ／＼な理由に對して、山は單なる言葉に依つて言ひ表はされるには、餘りに微妙に登山者の心にまで親しいものである。(Harold Raeburn, Mountaineering Art の跋詞)